



ますが、これは誠に残念なことです。スポーツの目的は、できるだけうまくプレーできるようになるためには何でもやってみることだと、子ども

たちに理解させなければなりません。来てくれたチームに「ありがとう」と言い、試合でプレーができることに対して相手チームに感謝し、勝ったチームに「おめでとう。とてもいいプレーだった。君たちみたいになりたいな」と言うように教えなければなりません。また、試合後は反省しなければなりません。上達するためには何をすればいいのか。この試合で何を学んだのか。前向きに子どもたちを評価し、子どもたちが上達するように仕向けることが重要です。しかしながら、キンボールスポーツは楽しくなければなりません。子どもたち、特に幼い子どもたちに対してはこのスポーツが楽しいから練習に来て、積極的に参加しているという状況をつくらなければなりません。ですから、楽しいリードアップゲームを最初に行った後にキンボールスポーツに移る必要があります。

私は8歳～12歳の子どもたちを指導していますが、キンボールスポーツを練習したり、楽しんだりすることでそのスポーツの本質を発見させなければならぬと考えています。最優先事項は、キンボールスポーツをプレーするためにわざわざそこに行かなければならないことが自分にとっていいことだと思ってもらうことです。スポーツの練習ですから、当然そこには尊重すべきルールがあります。だれもが最善を尽くして上達しなければなりませんし、自分のチームのために全力を尽くさなければなりません。現在、子どもたちにはまだ戦略的なことは教えていませんが、今後は、青年の部や成人の部のコーチとともに改良すべき点やどうやって戦略的なことを教えていくかを検討するつもりです。

私がこどもたちにキンボールスポーツを指導する上での目標は次の3つです。

- ・ともにプレーする喜びを見出し、キンボールスポーツに対する情熱を共有しているチームをサポートすること。
- ・子どもたちにやる気を起こさせ、練習を通して自分の限界を超えたいという気持ちにさせること。
- ・このスポーツ特有の価値『敬意とフェアプレー』を強く主張すること。

 **BIG THUNDER**コーチ  
酒井 英登 (富山県舟橋村)



平成16年に現在の舟橋村スポーツ推進委員に就任し、その委員会のスポーツ大会に参加し初めてキンボールスポーツを知りました。他の競技と違い、絶対的なエースの存在があっても勝てるものではなく、チームメンバー全員に役割があり、全員の意思疎通が図れないと勝てないこと。全員が思いを共有し、自分たちの結果が出たときの達成感は何事にも変えがたいことに大変魅力を感じました。利己主義にならずチーム内外の相手を思いやる気持ちを育むことができ、コミュニケーションを取らないとうまくいかず、協調性が身につく。今の小学生の心の成長には欠かせない要素だと感じました。

「小学生にキンボールスポーツを普及させたい!」という気持ちが徐々に強くなつていき、指導法を学ぶためにマスター資格を取得しました。平成19年に総合型地域スポーツクラブである舟橋文化スポーツクラブでキンボールスポーツ教室を開催

することになり、そこにBIG THUNDERのメンバーである当時5年生の女子4名が来ました。指導は初めてで不安でしたが、まずは、小学生とコミュニケーションを図り、勝たなくても楽しんでくればという思いで指導を始めました。

メンバーの中に1人背の小さな子がいました。小学生は特に身長差で優劣が出たりします。他の競技では身長だけで悔しい思いをしていたその子が、キンボールスポーツでは対等に戦え、これがやる気につながりました。チームメンバーには、他に器用でチームを明るくするムードメーカーもいれば、相手の気持ちを察して自分で動ける子、チーム全体を見て冷静に自分を判断できる子がいて、とてもバランスがいいと感じていました。練習し始めて間もなく富山県の県大会があり、そこで優勝し、これが自信につながり戦闘モードに入っていたのだと思います。この時点で既にチームメンバー全員が協力しないと結果が出ないということを皆が理解していました。

キンボールスポーツは、セットというヒット前にボールの下に入り、ボールを打つ土台を作る動きがあります。セットがしっかりできていないといいヒットは打てません。他のスポーツにはない要素です。セットする人は、いいヒットを打ってとヒッターに託し、ヒッターはセッターの思いを乗せてヒットする。これを繰り返すことにより、チームに強い「絆」や「連帯感」が生まれるのではないかと感じています。自然にチームワークが生まれ、気持ちが1つになれることに、他の競技をしている子どもたちからもうらやまがられています。

中学生になって間もない頃、フレンドリーの部で優勝したことで自分たちの力が大人にも通用することが分り、指導者である自分への信頼も得ることができました。しかし、それからが本当の戦いの始まりでした。中学生となれば、第二次性徴や反抗期がありますが、それぞれ個人差があり、体と心の変化が激しく、非常に難しい年頃になってきます。

チームメンバーには、自分たちの弱点を知って、私が目指しているものを一つひとつ理解してもらいました。課題をクリアできるまで練習し、クリアできれば共に喜び、練習態度が不真面目ならば練習を中止し、チームが目指している方向を共有することに努めました。チームメンバーと技術的な部分で口論することもありましたが、私を信じてついてきてくれました。結果を残すことで自信につながり、負けることでレベルアップできたと思っています。

中学2年生の時にジャパンオープンフレンドリーカップで優勝し、いよいよチャンピオンの部に移り、チャンピオンの部でも日本一という明確な目標もできました。指導者もレベルアップを図るために他のチームの戦いぶりを観察したり、動きの研究を行い「練習は本番のように、本番は練習のように」を合言葉に練習してきました。指導者と選手の思いを一つにできると結果がついてきます。私には、指導者として心がけていることが1つあり、練習中は選手を怒ることはありますが、試合では絶対に怒ることはありません。選手は、一生懸命にプレーして、自分の役割も十分理解しています。ミスをしたくてしたわけではありません。怒ることで選手は萎縮し、次のプレーに自信をなくします。私の役割は、コートに選手を送り出すまでです。選手が主役ですから、チームの力を出し切ることが最重要だと考えています。それが指導者としてBIG



THUNDERから学んだことです。中学3年生主体のチームがジャパンオープンチャンピオンズカップで準優勝できた源だと感じています。